

人間の経済

第2期 第 **17** 号 (通巻95号) 2005年5月11日刊

目次

現金、信用、そして多角間清算システム

 ヴィクゼルから

 なんともゲンキン

 金融のシステム

 多角間清算システム

森野 榮一

[wija/iWAT Tips]

アリスの承認

森野 榮一

現金、信用、そして多角間清算システム

森野 榮一

ヴィクゼルから

地域通貨と呼ばれるシステムにはいろいろありますが、

- 紙券を発行するタイプ
- 口座処理タイプ
- 証書利用のタイプ

など、いずれをとっても、決済に使われていますから、貨幣システムに違いはありません。もう各種の通貨が併用される時代にいるわけです。こうした現実をうまく整理してアタマにいれておく必要があると考えています。

それは、それらそれぞれの性格の違いを承知しておくことでもあります。比較して優劣をつけるなど、それらの性質の違いをみれば、成り立たぬこと自明であるにもかかわらず、じぶんたちの仕組みがいちばん、などというところも以前は見受けられました。しかしいまは、多様なシステムが遂行者の意向や意図、実現したい目的に応じて使い分けられています。

これらを信用のあり方から見ておくと、事の理解で混乱しないのかもしれませんが。

かつて、ゲゼルと同時代のヴィクゼルは、こう述べていました。

…したがってわれわれはこれからの議論の基礎として、そこでは貨幣が紙券の形態では実際に流通せず、あらゆる内国での支払いが資金転送の仕組みや帳簿処理で実行される事物の状態を想定していくつもりである。こうした純粋に想像上の事例の分析は、私には、等しく純粋に想像上の事例であり、信用がなんらの役

割を演じることがない純粋な現金のシステムの完全な対称となっているゆえに、価値があるように思われる。実際にさまざまな諸国で使用されている貨幣システムは、これらの極端な典型の複合物とみなされる。」(クヌート・ヴィクゼル、『利子と物価』第6章)

ヴィクゼルは、理念型として

- 現金のみが使われるケース
- 信用システムのみによって決済がなされるシステム

を挙げ、

後者については、

- 単純な信用システム
- 組織化された信用システム

に言及していました。

後者の組織化されたシステムは今日の金融システムがその典型ですが、(実際に、多くのひとが見忘れがちな点に、一つ一つの銀行があるのでなく一つの金融システムがあるという視点があります。)なんらかの団体運営を要件としているという特徴を持っています。

非常に原始的ですが多角間清算システムもTR(交換リング)として組織されるときには、団体(あるいは社団の形成)の運営を必要とします。

ヴィクゼルの時代には気づかれなかったことですが、単純な信用システム(社団、団体等の形成を必要とせず、組織化、社会的構造化を必要としない)がネットワーク社会のなかで、違った発展の可能性を持つことは、ワットが実証しはじめているところです。

ヴィクセルは、現実がこうしたいいくつもの仕組みの複合物として成立している事実をみていますが、この点は重要でしょう。なぜならわたしたちは、社会生活のすみずみまで、共同主義が勝利してしまい、一元的な価値しか存立しない社会をおそらくは望んでいないからです。

なんともゲンキン

自由と恣意と放縦と、あらゆる逸脱を許容する現金はまず、なくならないでしょう。なぜでしょうか。

その前に現金、キャッシュってなんでしょう。

怪しげなNPOもあるやに聞きますが、たとえば、そうしたところが出す紙券を私が持つとき、それは現金でしょうか。

現金、キャッシュと聞けば、とにかく、いいですね。

年寄りが、ちょっと小遣いやろうかといって、子供に握らせてくれるのは、現金。駄菓子屋に飛んでいく。

「現金な奴だ」といわれるときの、現金。そうさ、俺はカネにシビア。人でなしのカネだけの人間さとするてみせる。しかしやはり俺はゲンキン。

***が、そっと袖の下に入れるもの、現金。カネなくして力と名声を求めうるかと、高らかに笑う。

現金、現金があれば、我が意を通すのもラク。

労苦・煩勞も現金があれば人にさせることができる。

現金。そう札びらを切れば、切り続けるかぎりは大もてだ。

現金。俺に放縦な自由を保証するもの。それなくしては権力を振るえず、人に相手にされず、零落の境遇という不幸、不自由。

真面目に一所懸命生きてても、好いてくれないもの、現金。

人が信じているのは最後は現金だから、こんな零細企業に、明日の支払いを前に、首くくりの相談までさせる過酷・冷酷の使者、そう、現金。

誰もが欲しがるもの、現金。

たとえ大災害のときも、銀行カードが使えずとも、それを行使すれば、所望のモノが手に入ろう。どこかにモノやサービスがあるかぎりは。

それは額面として記載された数字の範囲で振るえる権力。

誰もがそれに目を吸い寄せられて、持ち主に頓着しない、誰もが欲しがる紙切れ…。

それは只今使える。それを使うには、1週間待てと言われることのない、まさに現在のカネ！

こうした現金が力を失うことなどあるのでしょうか。

それは、現金であっても、その力によって、必要としている生活の実質的な財や役務が手に入らない状況に人が置かれ、人がそうした状況を受け入れざるをえなくなったとき、事情は変わり、紙切れとなったそれを人は踏みつけるでしょう。

しかしそれはかなり考えにくいことでもあります。

かつて、安藤昌益は現金が力を喪失する状況をこう描いています。

金銀錢無益の事 凶年に転下諸穀実らず、衆人餓死する者多し。強気の者、飢に迫りて斬取り、盜賊す。路の辻に乞食二人有て、一人は粟・米二升許り持てり、貰ひ溜たるなり。一人は金一步、銀小玉三つ、錢百文袋に入り、首に掛く。強盜之を視て、粟・米を奪ひ取り、金銀錢を取らず。是れ、無益なること此に知ぬ」(安藤昌益、『自然真営道』[古藤友子、「安藤昌益の実心実学」より重引])

確かに、近世の飢饉のとき、そこうした事態は観察されたでしょう。

しかし、第二次大戦のとき、B29の焼夷弾の雨あられのなかでも、札びらで土地を買いあさった資本家もいたそうです。買いあさった資本家は戦争後を見越していましたが、カネを受け取った人は、絶望の状況のもと、カネの、悲劇的な状況であればあるほど、力を発揮し(実際、土地は持って逃げられませんが、カネは自由を与えます)、頼れると信じられる性質のほうを選んだのです。

近世においては、こんにちほど人は動けません
でしたから、たしかに先ず食料でしたでしょう。

とにかく、金銀錢無益とはよほどの状況といえ
ましょう。そうして、人は先行き、ひどくなりそ
うだという予測をもつほど、現金を選好します。
そうして、もし状況にして極限までいけば、頼
ったものが頼りにならぬことを体験します。現金は
紙になります。

まったく逆説的ですが、この逆説はなにに由来
しているのでしょうか。

この答えもはなはだ逆説的ですが、人間ではな
くて、人間以外の物質に信用の基礎をおくような
人間の関係を作ったからです。

つまり、

- お互いを詮索しあわなくても、決済をなしう
るという状態（匿名性の保証）
- お互いが決済で受け入れるであろうとお互
いが信じ、別の第三者にも決済手段として受け
入れられると信じられる、人間以外のなにか、
つまりモノを共同で作りに出すこと（古代にお
いて人間が借財の返済手段として用いられた
時代と地域がありました。それはモノとし
て人に所有されていた人間でした。古代ギリ
シャでは自分の妻女を借金返済にあてるこ
とが行われましたが、禁止されていく歴史が
あります）を作り出してきたわけです。

これは金銭無用ではなく、ひとが共同して生き
るに際して最低限の信用の状態として形成してき
たものでしょう。

したがってこれを保証するために、

- 受領の法的強制（第三者は必ず支払い手段と
して受領するとの信頼を保障）
- そのモノ（紙っぺら）の保有者をもって所有
者とするルールの確立。

が最低限必要となります。（金属貨幣の時代の話
は省略）

この最低限の保証、それは人が作る公共に依拠
しますが、それが崩れるときは崩壊します。国家

の崩壊ですね。国家貨幣の崩壊はそれを成立させ
ている国家システムの信用失墜ですから。そこで、
信用失墜を避ける公共の運営が政治の課題となり
ます。

それは上記のような最低限の信用にたつ現金は、
紙幣となった今日、次ぎのような根本事情を抱え
ているからです。

- 通貨の供給は独占的でなければならない。つ
まり、紙幣を使用しているということは、そ
の生産費が無視しうるほどに小さいというこ
とです。もしこれが自由な生産に任せられれば、
それによって入手しうる財や役務で測った紙
幣の価値は、その限界生産費にまで低落する
でしょう。そこで、貨幣は財や役務とは違っ
た特別な製造物でなければならず、その生産
費にかかわらず供給される独占的なもので
なければならなくなります。でなければ、財・
役務でみた貨幣の購買力はなりたないから
です。だれもがきわめてわずかの費用で真贋
みわけのつかぬ偽金をつくれる状況では、貨
幣の購買力はゼロになるでしょう。つまり紙
くず。
- 現代の貨幣はどのような目的であれ（蓄財の
手段としてさえ）使用されることによって貨
幣となるので、国境の内側で実効的である法
によって受領を強制されるべきである。

これらは、なんとも自由にみえる貨幣が、その信
頼を得るために、国家社会の信用に頼っているこ
とを示しています。但し現金は、この事情に頼る
だけであることにも注意が払われるべきでしょう。
現金以外の決済システムは、いっそう信用の状態
を必要としています。

そこで、ヴィクゼルのいう単純な信用と組織化
された信用システムが問題になります。後者を金
融システムと多角間清算システムを例に見てみま
しょう。

金融のシステム

経済社会には各種の業界があります。例えば自
動車業界であれば、これを指すとき、自動車産業な

どと総称します。ところが金融業界はどうでしょう？金融産業とはいいませんね。

金融システムといえます。

どうして金融システムというのでしょうか？

どのようなものを見るときも、全体で見るときと、それを構成する個々を見る場合があります。しかし、システムという場合、いずれのアプローチをとっても、全体としてみるのが不可欠であることを暗示しています。業界でシステムというのは金融に限ります。

それは、私たちが個々の銀行と付き合いながらのよう日常意識していながらも、実は金融システム全体と付き合いながらを示しています。

銀行は借入に対して100%の支払い準備をしているわけではありません。しかし日々各行は資金需要が発生しています。これらを金融機関同士で資金融通しあうインターバンク市場があって融通しあっています。こうした仕組みも含めてシステムなのです。その頂点には中銀が控えています。

これは組織化され、体系化されたシステムを作っています。この体系自体が高度な信用の状態を実現しています。

これは今日、国境のなかに限られたものではありません。金融の自由化は国境をなくしてしまって久しいものがあります。このシステムは国境を越えて、信用に基づく巨大な力を発揮するに至っています。

たとえば、国際間の銀行間再預金を事例にとりあげましょう。

銀行を、 $b = 1, 2, 3, \dots, n$ としましょう。X国に太郎さんがいました。いま100円もっています。使う予定がありません。それで、銀行 b_1 に預けました。銀行のバランスシートの資産方を L 、債務方を R としましょう。 b_1 は預金(借入)をしましたので、100円の債務が立ちます。 R_1 には100。同時にその100円は資産ですから L_1 には100が立ちます。この100円を b_1 は b_2 に再預金します。もし b_2 が海外の銀行であれば、国内的な準備金規制がありませんから100%、つまり100円が貸し出されます。 b_2 の R_2 には100円(仮定上すべて円を使っているとします) L_2 には

資産として100が計上されます。 b_2 は同様にして b_3 に再預金します。話を n までいかせず、ここで止めて、 b_3 は取引先企業にこの100円を貸しました…ここでなにが起こっているのでしょうか。だれでもわかることは、太郎さんの100円が、 b_3 の取引先企業に貸し出されたということです。100円は太郎さんの手から企業に渡りましたとさ。それだけでしょうか。 b_1 はあいかわらず100円の資産をもっています。だって b_2 に貸していますから。 b_2 はあいかわらず100円の資産をもっています。だって b_3 に貸していますから。 b_3 は企業に貸した100円の債権を資産としてもっています。つまり、最初の100円は金融業者をめぐるうちに、世の中全体では400円もの金融資産に成長したのです。

国際金融の場合(いま内国市場もそうですが)、ではこうした預金のような資金転送は電子的に行われています。そこでは

- 瞬時にカネがうごく。
- コストはIT化でたいしてかからない
- ということは、再預金の回数はいくらでも容易になされうる

ということは…

- 太郎さんの100円はいくらでも膨らんでいく。
- しかし太郎さんには、わずかな預金利息しか付かない。
- 100円は金融業者に莫大な利益と力をもたらしていく。

なぜ太郎さんは b_1 に100円預けたのでしょうか。もちろん金融システムを信用したからですが、システムとして、それは預金者の想像もつかぬ秘密を抱え込んでいるのでした。

もちろんここでは金融システムが全体として貨幣と信用をコントロールし、金融力を私的に独占しているかについては、銀行間再預金などほんの序の口で、金融派生物までふくめれば信じがたい

手法で膨張する宇宙のように貨幣が膨らみ続けているわけですが、詳しくは述べません。

多角間清算システム

いくぶんなりとも組織化されてシステムをなしている点で、多角間清算システムは、金融システムと比べものにならないといっても、ある信用の状態を築き上げるものとなっています。

- それはまず仲間組織が形成する市場です。
- そうして取引決済に口座処理システムを使用します。
- しかしその口座処理システムは、単なる口座利用の相互清算を超えた全体としてのゼロバランスの形成を不可欠としています。

単なる相互清算では、債権と債務が誰が誰に対してもつものかが明瞭です。しかし、多角間清算システムではたとえば手形交換所とは大いに異なっています。

仲間をなす会員個々のもつ債権や債務は特定の会員に対して持たれるものではありません。つまり

- 会員のもつ債権は会員の誰に対しても請求してよいものとされ
- 会員のもつ債務は誰に対して清算いてもよいものとされ、債権・債務は匿名化されています
- それをなりたたしめる理由は、全体のバランスでは債権債務はゼロバランスとなるという事情です。

これは、このシステムが、まず、会員の仲間たちが共通に立脚する基盤として、仲間全体で作るおおやけとしての（つまり共通所有としての）大きな口座（勘定）が共同で建てられているということを示しています。

もちろん、債権・債務が立つ会員個々人の口座（あるいは勘定）もたちますが、それはこの大きな勘定の構成部分をなすコンポーネントとして成立しています。

その意味で、会員個々人の口座は、プライベートなものにみえながら、じつは公的な性格をあわせ持っているといえます。つまり、全体への会員個々の責任が曖昧である場合には、個々の債権・債務を匿名化しながら、全体としてのゼロバランスを維持できません。

個々の会員の口座バランスが債権や債務のいずれかに傾き、それが個々人でさまざまでありながら、全体としては、資産方と債務方はつねに同額でバランスしているはずであるという信仰がなければ立ちゆきません。（個々人のプラス残に課税することで、システムの運営コストを捻出しているシステムでは、一見、全体のゼロバランスが崩れるようにみえますが、運営費徴収元の運営者の個的勘定を含めればゼロバランスとなります）

この仕組みが前提する信用の状態はかなり高い水準のもので、

そこでは、

- 債権・債務の匿名化を受け入れることが可能なほどの連帯感と（誰もが責任を果たすはずだという期待に基づく）
- それと対になった責任性（誰もが果たしている責任を自分も果たすのだという意欲）

が成立していなければなりません。

問題は、これが会員が仲間になる手続き（＜団体に固有の儀式＞）を通して各自に獲得されるのか、あるいは、運営者の運営のよろしきがそれを保証し続けることができるか、または、このシステムへの参加と関与の深まりが当の個人をそうした方向に陶冶していくか、にあるようにみえます。

しかし、

- 深い関与をしたものは債権を貯め、つまりプラス残が残り、それを解消する請求先や需要物を見つけられず、上記二条件への疑念を発生させることがよく指摘されます。
- また自己の寄与を考えず、欲しいモノをあたかもいつ返済しろと迫られない債務によって購入し、得をしたという意識もみかけます。なぜなら債権・債務の匿名化は、個人の責任

性を全体化することを意味するからです。道徳性が高い場合はこれはシステムの信頼の強化を意味し、逆の場合はシステムの信頼を傷つける可能性があります。

金融システムの場合はその信用維持に、法的等々の外的制約・保護がなされていますが、人々の自主的に形成する団体が運営するシステムの場合は、参加する個々人と運営する人々の倫理性がこの仕組みの信用を維持させるだけです。これはかなり取り組みがいのある組織化の事例ともいえるでしょう。

強い信用は、もし外的な信用付与という要因に頼らない場合、そのシステムへの高い期待や意欲に依拠する面があります。しかしこれは、それと裏腹のリスクと二人旅ですし、期待や意欲が高いほど、目に見えない、それと気づかれないコストを無視させる傾向があります。

- 特定の人間の犠牲的献身であるとか（たとえ本人が喜んでそれをなし、そのことによって煩勞さえ利益と感ずる場合があっても、人はその事情を変えるものですからシステム運営の側からはそのリスクが意識されていなければならないわけです。よくあるあの人がいなくなったんじゃあ、仕方ない止めようとか…）
- 継続的には個人がなしえないような貢献（一時的がんばり）とか、
- 過剰な精神性への期待とか、

はおうおうにして、注意がおろそかになり、当然視されることがあります。

しかし、システムがその存続を人間的要素に頼るほど、システムリスクは成長していきます。

自発的に拡大していく動きをどう見つけ、育てていくかが運営にとって必要なこととなっていきます。

19世紀のフランスで、G・マドールが初めて、単なる相互清算（多数の人間が参加して相互清算するのも含む）ではない多角間清算システムを具体的に着想したとき、彼は貿易業者でしたから、当時、最終的な清算尻の決済に使用されていた国

際通貨としてのゴールド使用の回避による利益をみていたように思われます。それを可能にするのが友人であった社会主義者ブルードンが提唱していた相互主義であり、協同して連帯をなす関係、そうした団体の形成が、それを可能にするのではないかと考えていたようにみえます。彼からみると、ブルードンの交換銀行がその会員になった者が提供を約した財・役務と引換に交換銀行券を入手し、会員は市況によって決まる価格で会員相互に必要な取引をなすもので、相互主義を実現する信用と流通の組織化としては不十分にみえたのかもしれませんが。より強い信用の状態をなす共同の口座を形成し貴金属貨幣を介在させず、取引業者間の強い連帯を表現するものとして、彼のシステムを提起したように思われます。

交換銀行の場合は会員の財・役務の引渡が信頼できるかどうか、交換銀行というシステムの信用の基礎でした。取引される財や役務は、通常の外部市場となんら変わらず価格決定されます。ただ生産者は自己の生産物を交換銀行券のかたちで購買力に変えることができると期待されただけでした。マドールには多角間清算システムのような決済を共同の口座のなかでなす（前述したように各自口座はその部分です）共同性の水準への高い期待が必要に思われたのでしょう。

これらはどのような組織化された信用システムを期待するかの違いにります。もちろん、それをどのような貨幣改革・社会問題の解決の文脈で評価するかという問題はあります。しかし、それは別次元の社会的争論にも関わる理念の介在を不可避とします。ここではそれに立ち入りません。ケインズの国際清算同盟の仕組みへの言及が必要かもしれませんが、仕組みとしては、国家を会員とするマドール型ではないかと考えていますが、別の場所で議論しましょう。

こうした組織化された、あるいは組織化を必要とする信用のシステムと異なり、長い間、単純な信用の仕組みは、それだけの、一時的な取引手法として簡単に言及されるだけでした。それは経済活動を抱え込む、社会的・文化的枠組みのなかで、個人間取引の諸手法を表現するだけでした。しか

しいまネットワークの時代となり、社団の形成とそれが提供する信用、またそれへの信頼を不可欠としない、純粹に個人間の関わりである p2p 型のワットシステムが新たな、そして強力な信用モデルとして登場してきました。

[wija/iWAT Tips]

アリスの承認

森野 榮一

以前、リアルWATをしている中小企業の社長さんと話していました。

社長、「これ～（WAT券）、やはり手形だから、その筋（やくざ屋さん）に渡ったらいやですよ」

私、「そうですね」

私、「でも券面をみてください。約定に、＜・・・合意しうる・・・＞とわざわざ入れてありますでしょ。合意できなければ、仕方がないのでから、清算請求を断ればいい」

社長、「合意の強要ってこともありませ～」

私、「だいじょうぶですよ、清算は「合意できる財・役務が市民発電所電力債なんですから。それを買ってきて引き渡せばよい。WATBANKのeWAT(ワットエネルギー証券)でもOKです」

社長、「そうか、我が社発券のWAT券は未来を考える人に持っていってもらいたいが、そうでない連中にも持ってもらうてもだいじょうぶなわけだ」

リアルWATでは発券者のアリスが自己が発券したWAT券が既発券として取引されるときに、毎回、承認の問い合わせがあるわけではありません。しかし、自己のWAT債務を望まれぬ人にもたれる場合のしほりとしても、上記のような約定が機能するわけです。

iWATでは電子化にともなって、発券者アリスに既発券取引のたびに、承認問い合わせがいくのですが、ボブがアリスにアリスにとって未知のキャメロンへの支払いの為の連絡がきても、アリスは承認するか拒否するかの選択ができます。つまりアリスは自己のWAT債務の引き受け手に意向を反映できます。その意味で、リアルWATより強く発券者にとって望まれざる自己債務の引き受け手の登場にしほりをつけることができます。これはiwat化のゆえです。

wija インフラでは、暗号化メッセージ交換が容易ですから、ボブはアリスに、使用予定先のキャメロンについて、既知か未知かを問い合わせ、未知の場合は、キャメロンの紹介をし、事前承認予約を取り付ければよいですね。

つまり取引を成立させる強い信用の形成のなかで、場合によるとアリスとキャメロンが相識関係にたっていく可能性が与えられるのです。この強い信用に基づくネットワーク形成がまず iwat の基礎にあるわけですね。

SNS も wija 基盤上で展開されるならば、取引にかかる信用ネット形成よりば弱いですが、一定の信用形成に寄与できるかもしれません。しかし、その形成が清算取引未済の既発券使用プロセスで形成していく強い信用ネットワークとどう重なるか、ちょっと考えてみたと思っています。

編集・発行 **ゲゼル研究会**

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321森野榮一気付

Gesell Research Society Japan <http://grsj.org/> info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず